慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

予防医療センター移転・拡張

先制医療を実現する攻めの予防医療へ

私達が目指す予防医療とは、「病気を早期に発見して防ぐ」という防御だけではなく、「健康な状態で長生きできるように、総合的な健康増進を行う」という、もっと積極的な医療です。医師や看護師などの医療スタッフと十分に対話し、しっかりと適切な検査を受けて頂くことにより、まずは自分自身を知って頂くことから始まります。将来起こりやすい病気を、発症前の未病の状態で診断・予測し、予見的な介入を行う医療は「先制医療」と呼ばれており、「先制医療」による積極的な攻めの医療へのシフトを図っていきたいと思います。

慶應義塾予防医療センターは、2012年に開設され年間約6000人が受診していました。10年が経ち生活歴、家族歴、嗜好、血液データ、画像データなど、たくさんの質の高いデータが蓄積されています。今回の移転で受診者数を更に増やし、得られるデータを予防医療研究に活用します。予防医療センターでのドックを「パーソナライズド・ドック」と称していますが、ビッグデータおよび個々人のデータを詳細に分析し、個人に合わせた最善の検査プログラムの開発や、健康アドバイスへの応用を展開していきます。

予防医療センターでは、新たな会員制の予防医療メンバーシップも開始致します。検査メニューに加えて、多彩なオプション検査メニューも備え、トータルで2～3日間程度の検査期間になります。ウェアラブルデバイスなども活用し、日頃からの健康管理をきめ細かく行っていきます。超高齢社会における健康寿命の延伸において最も重要となる、身体のフレイルや心・認知のフレイルなどの、運動器障害や認知症の早期発見につながる検査も、当該診療科と共に積極的に取り入れる予定です。結果に改善すべき項目があれば、食事、運動の指導はもちろん、サプリメントなどの相談も行います。

Modern Urban Village-Green and Wellnessは、「麻布台ヒルズ」のコンセプトであり、あらゆる世代の人々が健康で生き生きと暮らせる街を目指しています。そこに住む居住者や、オフィスで働く従業員の健康管理プログラムの開発などにもぜひ取り組みたいです。

予防医療センターの医師は、常勤・非常勤を併せて約60人。男女を問わず、育児中で時短勤務の医師でも、生き生きと働くことができるモデルケースを作っていきたいと思います。これからもご指導のほどよろしくお願い致します。

（予防医療センター長　高石官均　69回）

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真１：エントランス
写真２：パーソナライズド・ドックフロア（５階）待合室
写真３：320列マルチスライスＣＴ
写真４：世界初の全身用立位・座位ＣＴ
写真５：開所式でのテープカットの様子
写真６：左から、高石センター長、北川常任理事、伊藤塾長、辻森ビル代表取締役社長、松本病院長

慶應義塾予防医療センターが麻布台ヒルズに拡張・移転

～未来型予防医療の実現のために～

2023年10月慶應義塾予防医療センターは信濃町キャンパスから離れ、新しい街「麻布台ヒルズ」に拡張移転いたしました。本塾初代医学部長・病院長である北里柴三郎先生の「摂生は本にして治療は末なり」の信念に則り、当院は1920年の開院当初より予防医療を医学の原点として活動して参りました。2012年には現在の予防医療センターを開設し、受診者の皆様からも高いご評価を頂いて参りました。受診者の増加、最先端の機器への更新の必要性から今回の拡張移転を計画する際、森ビル株式会社様から、未来型社会を模索する新しい街作りを慶應義塾と共に実現できないかというご提案があり今回の拡張移転に繋がりました。未来型予防医療を探求するための森ビル株式会社寄附講座である「ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座」は、2021年から先行して開始しています。

新しい予防医療センターのコンセプトは、「一人ひとりの人生と共に歩む医療を」です。立位CTなど最新・最先端の医療機器を導入し正確な診断を行い、ウェアラブルデバイスを用いて日常を高精度に可視化する検診プログラムを提供いたします。受診者に合わせて高度に個別化された検査プログラムと医療チーム一丸となったサポートにより、受診者ご本人の健やかな人生を実現します。また、慶應義塾大学病院として初めてのメンバーシップ制によるプログラムも展開します。新しい技術でそれぞれの未来を予測し、「食」、「睡眠」、「運動」、「メンタルヘルス」など多角的な健康づくりを行って参ります。万が一異常が見つかり、より専門的な治療が必要となった場合は、慶應義塾大学病院が責任を持って迅速な対応を行います。医療スタッフが「一家族」のように、一丸となって受診者に寄り添う慶應義塾予防医療センターへのご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

（慶應義塾常任理事　北川雄光　65回）

所長就任

所長就任のご挨拶

保健管理センター教授　広瀬　寛（65回）

10月から保健管理センターの所長を拝命いたしました。光栄であるとともに、重責をひしひしと感じております。センターで行ってきた仕事内容を振り返りながら、今後の抱負などをまとめました。

長く矢上地区の責任者を務め、労働衛生コンサルタントの資格も取得しました。2012年8月からは予防医療センターも担当し、現在も結果説明などで協力しています。2015年10月からは湘南藤沢地区の、2018年4月からは日吉本部の責任者になりました。健診の判定や結果面接、衛生委員会、診療所の医事システム、教室・食堂・職場の巡視、感染症登校許可や復職面接などの経験を積んできました。今後も、感染症対策や健診システムの更なる活用、健診データの電子化などは当センターの重要課題と考えます。

1986年から4年間内科の研修と専修を行い、1990年から腎臓内分泌代謝内科で主に糖尿病や代謝内科の臨床および研究をしてきました。当センター所属となってからも、教職員・学生やドック受診者におけるレプチンやアディポネクチンといった肥満関連因子や高血圧・インスリン抵抗性などとの関係で疫学研究を展開してきました。また、センター内の医師達や保健師達と共同で、学会発表や論文作成をしています。今後もセンター内や医学部等との共同研究も継続・発展させていきたいと考えています。

教育面では、「保健衛生」の教科書で肥満・メタボリックシンドロームや糖尿病、脂質異常症を執筆し、講義では肥満・メタボリックシンドロームや糖尿病、高血圧などを担当してきました。今後も学生達への教育や啓発は、非常に重要と考えます。

今後の抱負ですが、保健管理センターの業務は今後ますます複雑で多岐になり、しかも増えていくことが予想される中、センター内の医師達はもちろんのこと、他職種や他部署の方々との協調や連携は非常に重要と考えます。自身の健康にも留意し、当センターひいては慶應義塾の発展のために努力・精進していく所存です。ご指導・ご協力のほどを、宜しくお願い申し上げます。

広告付き案内板
（メディカルナビタ）
広告掲載追加募集

院内に設置しております「デジタルサイネージでのＣＭ放送」及び「周辺地図掲載案内板での広告掲載」について、設置事業者より広告掲載追加募集の一報がありましたのでお知らせいたします。

広告掲載のご希望やお問い合わせにつきましては、
表示灯㈱03-3797-4811
担当栗原（クリハラ）宛に
お問い合わせください。

追悼

猿田　享男名誉教授（43回）を偲んで

慶應義塾大学名誉教授　猿田享男先生は、令和5年9月20日にご逝去され、83歳の生涯を終えられました。謹んでここにご逝去を悼み、哀悼の意を捧げます。

猿田享男先生は昭和14年にお生まれになりました。慶應義塾には幼稚舎より入学され、インターン研修や海外留学などの時期を除くと、平成17年に名誉教授として退官されるまで常に慶應義塾の中に籍をおかれました。特に医学部においては昭和61年に内科学教授にご就任され、長く教授が不在であった腎臓・内分泌・代謝科を大きな、そして活力のある教室へと育成されました。また平成3年には大学病院副院長を、平成7年には医学部長を、そして平成13年には慶應義塾の常任理事を併任・兼任しつつ医学部と附属病院の発展に尽力されました。また特筆すべきは、信濃町キャンパスリサーチパークの建設を推進され、今日の研究隆盛の礎を築かれたことです。まさに慶應義塾に一生を捧げた人生といっても過言ではありません。学会活動におきましても、日本内科学会、日本高血圧学会、日本腎臓学会など、関連されるほとんど全ての学会の理事・理事長を担当され、各学術総会の大会長を務められました。さらに退官後も文科省や厚労省などに関連する様々な公職を歴任され、大学教授時代にも増してご活躍されたことは、我々の記憶に新しいところです。そのご業績は、平成16年の福澤賞を始めとする多くの受賞をもって飾られています。そして猿田先生の薫陶を受けた多くの弟子たちも、日本各地で慶應義塾の精神を引き継ぎながら、臨床・研究・教育に活躍しております。

私は猿田内科の初代大学院生として、猿田先生には長きにわたってご指導いただきました。直談判して大学院生として入学を許され、「君は坂口先生のところで腎臓病理を勉強してきなさい」と背中を押され、病理学教室の坂口弘教授のもとへ学内留学した頃を、昨日のことのように思い出します。なかなか研究成果が出ずに苦労していた時には、「腎臓はなかなか結果が出ないものです。分かっていますから、頑張りなさい」と何度も元気づけて頂きました。大学院卒業後、海外留学を経て他大学へ入職してからは、直接お会いする機会は減ってしまいましたが、常に猿田先生に認めて頂ける仕事をしようと心がけてきました。

令和5年9月20日に猿田享男先生が83歳でご逝去されたというご連絡を頂きました。猿田先生のお姿を心に刻まれている多くの先輩の先生方がいらっしゃる中で大変恐縮に存じますが、猿田先生と同じ腎臓内分泌代謝内科のほるか後輩として、私からも追悼の言葉を記させていただきます。

私が医学部に入学した時の医学部長が猿田先生でいらっしゃいました。私共は、女性が当時はじめて20名を超えた学年であるということで、入学時のグリーン食堂で行われた懇親会で猿田先生の隣にたまたま立っていた私に、「女性だけれども辞めてはいけませんよ、絶対に続けてくださいね」と話しかけてくださいました。その時が、私が最初に医師になる責任について実感した時であり、とてもよく覚えております。

私が入局しましたのは、ちょうど伊藤裕先生が教授として着任された初年度でございましたが、猿田先生は引き続き私達医局員のことをお心にかけてくださり、学会や研究会などでお目にかかると、温かい励ましのお言葉と共に「研究は、必ず将来の患者さんのためになるものでなくてはならないと思います」と臨床医としての研究が目指すところをご指導くださいました。また、私は（おそらく曜日の関係で）猿田先生の外来の患者さんをたくさん引き継ぎましたが、どの患者さんも猿田先生が大好きで絶対の信頼をおかれており、猿田先生が小走りで一瞬走り過ぎられたお姿を見た、と皆さん一目お目にかかっただけで元気になるくらい、喜んでいらっしゃいました。私はそのお話を伺うたびに、日本の医学界を背負われ、想像を超えてお忙しい中でも、診療を大切にされていたお姿を知りました。

猿田先生が体調を崩されて入院される前の8月に、私はお時間を頂いて就任の御挨拶にお伺いする予定になっており、お目にかかれるのをとても楽しみにしておりましたが、お約束の日の前日にご入院され、お目にかかることができませんでした。ご葬儀に参列致しました折、猿田先生の、ご家族の皆様との柔らかい笑顔のお写真や、大きな犬と一緒に床に寝っ転がっている写真を拝見した時、医学界の巨人でいらした猿田先生の人生が、不意に身近に胸に迫りました。いつも軽やかに小走りで移動されて、おそらく1分1秒たりとも無駄にはされずに、医師としての理想を体現され、あらゆる人のために駆け抜けられた偉大な猿田先生に、心からの尊敬と感謝を捧げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（腎臓内分泌代謝内科　林　香　83回）

今年（令和5年）、第66回日本腎臓学会学術総会の大会長を拝命し、不肖の弟子の晴れ姿を一目見ていただこうと張り切っておりましたが、ご臨席いただくことは叶いませんでした。ただ年初に頂いた年賀状には、私の大会長就任をうれしく思い、懇親会での乾杯の発声を喜んで引き受けると猿田先生の直筆で記されてあり、一生の宝物にしたいと思います。

猿田先生、長い間ご指導をいただき、本当にありがとうございました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。どうぞ安らかにお休みください。

（埼玉医科大学腎臓内科　岡田浩一　66回）

伊藤裕先生の最終講義にて医局員たちと。
前列左端から、猿田先生、林、伊藤裕先生

鑑賞知来

昨今、日本の研究力の低下が危惧されています。最近のNature誌にも、"JAPANESE RESEARCH IS NO LONGER WORLD CLASS－HERE'S WHY"というコメントが掲載されていました（Nature 2023）。文部科学省科学技術・学術政策研究所による科学技術指標2023を基に書かれたものでしたが、それによると、日本は20年前と比べてインパクトの高い仕事ができておらず、引用数トップ10％に入っている論文数は6％から2％に低下しているそうです。

原因としては、まず資金の問題が指摘されており、この20年間でアメリカやドイツでは80％増加し、中国では10倍に増加している研究費が日本では10％しか増加していないというものです。もう一つは、大学の研究者が研究に使う時間が2002年から2018年で47％から33％に落ち込んでいて、特に医学部では臨床業務に費やす時間の増加が指摘されています。また日本では、研究者当たりのテクニシャン数の少なさが際立っているようです。

つまり、まず多くはお金の問題です。潤沢な資金があれば、テクニシャンが雇用でき、研究に専念できるポスドク、スタッフが確保でき、研究時間も確保できます。どうか国全体で、志の高い若手研究者が存分に研究できるように、研究費の予算増額を決めてほしいと思います。そしてオリジナリティの高さで日本の研究を引っ張り、研究成果をより適切な形で、効果的に世界に発信できるような若手の教育が必要であると感じています。

私達は今日も、まずは研究費の申請書を書きながら、現在の治療を変えうるような日本発の画期的な成果、より良い研究を目指して、夢を持って皆で日々努力いたします。

（腎臓内分泌代謝内科　林　香　83回）